

温泉宿で女将さんとその娘さん二人と4P。巨根を舐めすすられ、射精回数は数十回

「……………ってことだ。じゃあな」タカヤは友人との電話を切った。ガラ空きの中車内。この日は一人で計画を立てて、ネットで予約して温泉旅行へやってきた。電車に揺られ数時間。すでに近くまで来ている。

最寄り駅に到着。スマホのアプリを確認する。宿はこの駅からバスで30分ほど。温泉街の中心部にある。街中である。景色は穏やかで車窓からすぎる風景を眺める。それが電車でもバスでも。タカヤの目的はそれであった。ひとときでもタカヤの住む都心の喧騒を忘れようと。

宿に到着。さっそく宿の女将さんがタカヤを出迎えた。脛まで伸びた浴衣の裾を少しまくって見せる。色っぽい。

「いらっしゃいませ。お客様・・・」

口紅が妙に赤く見える。豊満なバストが浴衣越しにはっきりと分かる。

左手を入り口に向けて伸ばす女将さん。

「こちらへどうぞ・・・」

横に手伝いをしていると思われる二人の若い女性がいた。二人とも肌色が不気味なほどに白い。静かなロビー。広い廊下が中へと続いている。

「早速お風呂はいかがかしら??」

頬を妙に赤くして女将さんは言った。

タカヤは長袖のシャツを肘までまくった。

「お言葉に甘えて・・・って言葉おかしいですかね??」

浴場は宿のメイン。この温泉街の宿ではどこでも広々とした露天風呂が設けられている。タカヤがこの宿に決めたのは検索してパッと目に映ったものだ。

浴場は玄関側とは真逆。宿を挟んで裏側にある。宿に入り、廊下を道案内され

る。

二人の女性は跡継ぎをしている女将さんの娘さんとのこと。ご主人は事業展開に精力的でしばらくはこの宿には来ていないとのことだ。

連添ってくれていた娘さんの一人が用事があるということで事務所へ入っていった。

暖簾をくぐる。脱衣所の前。

「本日は偶然なのですが・・・」

女将さんは指を咥えた。

「ご予約のお客様がお客様以外におられなくて・・・」

タカヤは少し驚きながら視線を少し下げた。女将さんのピチピチの太ももが見えた。

4 P。

そんなことが脳裏をよぎる。瞬間的にそう感じたのは、女将さんが胸を少し持ち上げて準備運動をしたように見えたからだ。

1時間後・・・夢は現実となっていた。

タカヤは2つの女体を抱えていた。

事務所にいる娘さんを除いて親子どんぶり。3Pの快樂の渦の中。

おっぱいをお尻をとにかく夢中で口でしゃぶりたてる。

美味しい女体を味わう。

飽和しそうな性的快樂満足感の中、とにかく太ももを目いっぱい広げた二人の女性器をすすり上げていた。

女体入浴を終え、この旅初めての宿の部屋に向かったタカヤ。

すると、先ほど事務所へ行った女将さんのもう一人の娘さんが正座で待っていてくれた。手を前に差し出しゆっくりとお辞儀をしてタカヤを出迎える。

少しさきほどお尻の穴にペニスを挿入し続けていた娘さんの方より小柄で細身の女の子だ。

---

体験版はここまでです。

---